

2017年度 学校評価自己評価

1. めざす学校像

2018.3.31

<p>大阪女学院の建学の精神 (ミッションステートメント／2009年9月15日制定)</p> <p>大阪女学院は 創造主を畏れ キリストの教えに従って 一人ひとりを愛し 何が重要であるかを見抜く力を養い 喜びをもって 進んで社会に仕える人を育む</p>	<p>大阪女学院が育もうとする学生・生徒像</p> <ul style="list-style-type: none"> *キリスト教に基づく愛と奉仕を実践する人 *自由な学びの中から、物事の本質を見つめ、自己の進路を選ぶことのできる人 *英語力を基礎に幅広い教養と公正な判断力を身に付け、自律的・主体的に行動できる人 *性別の役割にとらわれずあらゆる可能性に挑戦し、女性の尊厳の確立に努め、リーダーシップを発揮する人 *社会の課題に関心を持ち、世界、日本、地域のために仕える人
---	---

2. 中期的目標

運営基本方針 (2014～2019年度／Ⅰ期及びⅡ期中期計画において)

グローバル化の進展に伴う市場原理による競争主義の台頭により、我が国においては、経済をはじめとして社会のあらゆる分野における既存のシステムの変革が迫られている。さらに、「知識基盤社会」における「知」は容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりを持つことは論を待たない。大阪女学院は、このような環境変化に的確に対応するとともに、130年間にわたり育んできた精神を堅持し、2014年度から2019年度において、次の方針によって、健全な運営を創出する。

- *教職員の知恵と力を結集して、歴史と伝統に証される良き学校運営を継承する。
- *これまで育んできた学生・生徒像、人格を育む教育力、積み上げてきた教育・研究活動の成果を広く社会にアピールし、学生・生徒の安定的な確保に力を注ぐ。
- *本学の建学の精神を実現するために変化しなければならないことについては、強い決意をもって迅速な対応を行う。

Ⅰ. 建学の精神と教育理念の実践

2016年度事業計画より

1. キリスト教に基づく人間理解の深化

大阪女学院中学校・高等学校は女性が一人の人格として、何らかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事をするを誇りとし、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力をもつ人間を育むことを目指す。宗教教育については、長年の実績を踏まえた上で、キリスト教に基づく人間理解を深め、一人ひとりがかけがえのない存在であることの自覚を促し、生徒自らの生き方と他者とのかかわり方を学ばせる。また、入学後、保護者に対しても、学校への理解を深めてもらえるよう努める。

2. 建学の精神の再認識と再構築

本校生徒、教職員の誰もが自分の内面に向き合う礼拝の時間を大切に、祈りののちで他者に使える志を涵養することで国際的なミッションによって設立された女子教育機関という建学の精神を再構築していく。

Ⅱ. 教育の内容と学習支援の充実

教育理念を具現化するため、自身に与えられた賜を活かし、社会に貢献するために生涯学習し、成長を続けていく「真の学力」ー学力、協調性、人権意識、規範意識、国際性ーの習得を目指す。国が示すグローバル人材の育成、高大接続改革等は、得立依頼本校が目指してきた教育理念と重なり合うところから、探究型・教科横断型・アクティブラーニングへの移行に積極的に取り組む。また、本校は国際バカロレア・日本語ディプロマ(以後IB・日本語DPと表記)の候補校となり(2016年6月)2018年度高校入学生の2年次にDPがスタートする。二つのワークショップに専任教員全員が参加することを目標にし、今後の学校全体の改革につなげていくことを目指す。

学力向上の取り組みー新しい学力観への対応

学力についての考え方が「思考力・判断力・表現力」及び「意欲・経験・多様性」を重視する方向に大きく転換していく現代、本校が従来から行ってきた国際的な視野と主体性を育てる教育活動をさらに進めていく。また、先進的な教育活動を研究し、導入する。

- (1) 自学自習、自己管理能力の養成…OJダイアリー、学習計画表の活用
- (2) 論理的思考力の育成…中1・2「論理エンジン」の導入、中3探究型課題学習2018年度スタート準備
- (3) シラバスの検討・改善…教科学習のシラバスの見直しとともに・宗教・人権学習・ボランティア・クラブ活動・生徒会等の活動を関連づけ、総合的なプログラムの構築を目指す。
- (4) 英語科、英語教科としての英語改革…高2英語科対象エンパワーメント授業の継続、発展。4技能英語外部検定取得の体制づくり(高1・2へのspeakingの導入)
- (5) 「国際特別入試制度」(中学2015年度より)の継続と発展…入試広報に努め、この制度による入学生の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。
- (6) 国際バカロレア(日本語DP候補校として認定校を目指し、探究型・教科横断型の授業を展開する為に全教職員で学びを進める。また海外への進学を含め、世界を視野に入れた進路指導を行う。
- (7) 高等学校普通科理系の2コース制の導入…受験生及び中学内部進学生のニーズに応じて開設した理系1類、2類を充実したものとし、希望進路を保障できるよう整備する。

2. 国際理解教育の推進

留学や留学生との交流を通じ、言語への関心を深め、言語や文化の違いを知ることで、世界に目を向け、広い視野をもって物事を考える生徒を育てる。YFUの年間留学生受け入れに加え、オーストラリアのRavenswood校(姉妹校)との交換留学、カナダのオタワにあるLongfield Davidson校(姉妹提携校)、YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月)との交流を通して、国際(異文化)理解に取り組む。また、交換留学制度を利用して、留学を希望する生徒の支援をしていく。高等学校3年間で実施している現行留学制度(夏期海外研修・短期留学・年間留学)に加え、2016年度にスタートした高等学校1・2年時3学期に実施する中期留学制度の充実を図る。

3. 生徒・教員の人権意識を深める取り組み、生徒の心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援

「私たちの人権感覚を問い直そう～一人ひとりを大切にしよう～」を目標に人権学習に取り組む。人間関係を構築する力の育成ールール遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解ーに努める。SNSを利用の知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。

4. 学校行事による集団づくり

さまざまな行事への生徒の主体的な関わりにより、集団の中で自他を活かして協調性、創造性を育む。

Ⅲ. 教育の実施体制の改善

1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み

(1) 広報の充実 (2) 説明会・学校訪問への全教員での取り組み (3) 入試対策室の充実 (4) 中学「国際特別入試制度」の継続と発展

2. 組織改善の取り組み

一貫教育充実のため、中高6年を偏りなく経験できる人事、世代交代を見据えた指導理念・スキルの継承のためのベテラン教員の人事を行う。

3. 中学・高校としての図書館機能の充実

(1) 蔵書充実 (2) 利用教育 (3) 図書委員会活動 (4) 広報の充実 (5) その他 タブレット端末活用の授業の為の環境整備

4. 教員の人材育成

(1) 建学の精神及び世界の変化・課題についての学び (2) 支え合う組織づくり (3) 他校との連携 (4) 新しい学力観・授業形態への対応 (5) 人権意識の向上

5. 中高大短連携プログラム

(1) 宗教・解放プログラム (2) グローバル進路 (3) 大学院との共同プロジェクト

Ⅳ. 生徒支援 生徒の自己実現を促す進路指導

1. 生徒の自己実現を促す進路指導

(1) 進路選択への指導・助言 (2) 基本的学習習慣の確立(OJダイアリー・ビッグシスター制度) (3) 英語外部検定への対応

2. 心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援

保健室・教育相談室・サロトルム及び病院・関連機関との連携。教員の支援スキルの向上。スマホ依存・トラブルへのサポート

Ⅴ. ICT教育の推進

ICT技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する。

Ⅵ. 教務の新(入力)システムの導入準備

独自システムではなく、多くの学校が採用している入力システムを本格的に研究する。

Ⅶ. 危機管理

大地震を想定した危険回避訓練を教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者がした場合の対策について検討する。

地域の避難所としての対策を検討する。重要情報・個人情報漏洩防止への対策を行う。

Ⅷ. 施設・設備の保全と充実

南校舎外壁補修継続、チャペルの空調及び校舎の空調設備の整備等、優先順位を決めて工事の計画を進める。

Ⅸ. 教員の労務環境改善

1週1日の研修日の維持改善に努め、より働きやすい職場にしていこう努力する。育児短時間勤務を3歳から小学3年生までと改訂。介護休暇についても検討を進める。

X. 経費削減と効率化

中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。補助金制度を有効活用する。

【自己評価アンケートの結果と分析】

自己評価アンケートの結果と分析		
○生徒 [2016年12月実施]	○保護者 [2016年12月実施]	○教職員 [2017年 2月実施]
生徒	保護者	教職員
<p>宗教教育・解放（人権）教育について</p> <p>宗教教育については肯定的な回答率はこれまでの傾向と変わらず、程度の差はあれ、中2で停滞または落ち込みが見えるが、学年が上がるにつれて本校の目指す教育目標を理解し、キリスト教的な考え方を身につけていくことがわかる。</p> <p>解放（人権）教育についても、宗教教育とほぼ同じ経過をたどる。ただここ数年は中2での落ち込みが緩やかになりつつあったが、今年の中3は中2から、宗教についての項目ととともになだらかではあるが下降傾向が続いている。今後の中学生の推移を見守りたい。自我が芽生える時期のこのような傾向は程度の差はあれ成長の過程である。宗教、解放のプログラムでの学びは、学年が上がるにつれて、これまで継続してきた基本的人権、平和についての学びを継続しつつ、現代社会の課題である様々な国の人々との共生、(発展途上国のみならず)日本の中にある貧困、子どもの権利、非正規雇用、ジェンダーギャップ、トランスジェンダーなど、目の前の事象を見つめて、自身の進路、生き方と直結するものとなっている。高3までの3～6年間で、どの学年も各々の個性や人格を尊重し合い、解放プログラムで取り上げる社会的なテーマに関心、理解を深めることに繋がっている。加えて、宗教教育プログラムで聖書の言葉に触れて自己の内面を洞察し、他者との関わりについて考えを深めていく。徐々にではあるが確実に、自己肯定の心を持ち、自分自身の言葉で考え、自分自身が社会に良い変化をもたらす主体となり、他者を受容し、助け合うために学ぶという意識が育っている。</p> <p>今年度特に感じたことは、北朝鮮を巡る国際情勢の緊迫、苛烈を極めるヘイトスピーチの現実等が、学校現場に与える影響であ。中学1.2年生の早い段階の学習プログラムに「在日コリア、在日外国人」を取り上げていきたい。</p> <p>生活指導について</p> <p>本校の生活指導の中心になっている「本当の自由」への理解一人に言われるのではなく、自分で考えて時々に応じた言動をとる一という目標については、その考え方を理解し、誇りを持って目指していく姿勢は中1からみな持っており、学年が上がるごとに、実行の難しさと、その重要さを更に深く理解して行くことになる。中1での意識は年ごとに開きがあり、70～90%を推移するが、高3では95%近くに到達していく。</p> <p>具体的な「社会のルールや公共のマナーが身についているか」「基本的生活習慣(遅刻、片付け、身だしなみなど)は身につけているか」という質問については、80～90%台を推移する。生徒たちの評価は、大人の目から見た評価よりも甘めであるように思う。特に中学生は、自分の言動の不十分な点には気づいていないところが多いようだ。具体的な指導を事あるごとに丁寧に行う必要がある。保護者との連携を行い家庭の協力を得て進めていく。大学入試改革等に伴い、スマホやタブレット、パソコンの学びの場への導入を必要に応じて進めている。e</p>	<p>保護者アンケート回収率は、中学72%、高校50%であった。ご協力に感謝する。</p> <p>課題の多い項目については、保護者のご支援に感謝しつつ、一歩ずつニーズに応える努力を行っていききたい。</p> <p>本校に入学したことについて、全学年の92%の保護者が肯定的回答をくださった。学校の教育方針も87%以上の保護者に理解されいるという昨年度と変わらぬ結果となった。</p> <p>本校のキリスト教教育が、生徒の日々の学校生活や行事、PTA(本校ではへール会と呼ぶ)活動を通して保護者によく理解されていることは本校の教育の大きな強みである。キリスト教教育を土台とした本校の教育方針が、生徒の人格形成、生涯にわたる学びの礎となっていることが認知されているということは、生徒を教育する上で最も重要な点で、教職員と保護者が一致して、生徒の人格教育にあたっているということであり、これが本校の教育の最も大きな特徴である。</p> <p>ニーズにあった教育活動、また教職員の熱意については、80%以上の肯定的な回答を得た。</p> <p>学校行事、生徒会活動、クラブ活動については、肯定的な回答が92%を超え、満足度は高い。クラブ・行事の学習との両立は常に課題としてあるが、全人格的な成長のために、これらの活動が果たす役割はとて大きく、生徒が主体となり、協力して目標を達成していく活動をこれからも大切にしていきたい。これらは、一貫教育の中で、学習や将来の進路選択、夢の実現へのモチベーションアップに確実に繋がっている。</p> <p>教育環境、施設設備の整備についても90%の保護者から肯定的回答をいただいた。</p> <p>庭の草花、木々は、創立から134年大切にしてきた重要な教育環境であるが、2017年度は、中学校舎の外壁補修、チャペルの冷暖房機具の入れ替え、中学・高校両方の校舎のwifi環境の整備を行った。年度末には中学校舎1階にEnglish acyivityのためのスペースを設けるための工事が行われる。</p> <p>また、大地震に備えてのマニュアル、備蓄や必需品の整備も少しずつ進めている。</p> <p>家庭への連絡、情報提供については、肯定的回答は平均すると79%であった。昨年度から2ポイント下降した。</p>	<p>教職員への自己評価アンケートは、下記の表「3. 本年度の取り組み内容および自己評価」における「評価指標」に基づいて行った。前年度との比較を行う主旨から、中期計画の項目と関連させたアンケート項目を立てた。</p> <p>また、分析は肯定的回答のパーセンテージを確認しながら進めたが、教員の回答は、昨年度と同様にどの項目についても「思う」よりも「やや思う」のパーセンテージが高い傾向にあり、掲げている課題への道は険しく、教職員が現状に満足せず、まだまだ高いところを目指している途上であることがわかる。</p> <p>I 建学の精神と教育理念の実践 キリスト教に基づく人間理解の深化／建学の精神の再認識と再構築</p> <p>キリスト教教育による人格形成、生涯学習の土台の形成について、肯定的な回答は94%と高く、昨年度より8ポイント上回った。昨年度下降したポイントが回復した結果となった。</p> <p>II 教育の内容と学習支援の充実 学力向上 中高6年間を見通して、基礎学力を定着させることに加えて、改革される大学入試に対応するカリキュラムを創るべく各教科で改訂作業を継続している。その上で各々の授業計画、指導目標を立て、授業を行った。「目標を明確にできたと思う」と肯定的回答を寄せた教員が78%であり、昨年度から4ポイント上昇。時代の変化が激しく、教職員の世代交代が行われる中、また今年度は国際バカロレア(以後IBと略す)認定校として本格的なカリキュラム準備に入り、IBカリキュラムから学ぶことも多かった。そんな現状の中で目の前の生徒と向き合い、根気強く指導の質を維持しようと奮闘している教職員の姿が見えてくる数字である。(中学生の授業アンケートに見られるA「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」が5ポイント前後アップしていることにも表われている)、教員間で研究、相談し合いながら発展させていきたい。</p> <p>一方で、「1年間で生徒の学力(学力推移、スタディーサポート等を参考に)は上昇したと思うか」との問いについては、今年度は55%と昨年とほぼ同じ結果となった。</p> <p>自己管理 昨今の生徒の現状から、学力向上を目指すため、スケジュール等の自己管理能力の養成は必須であると考え、中学生からこの課題の指導に力を入れてきた。自主学習時間(今年度より中1・2は「論理エンジン」の学習に切り替え)、OJダイアリーの取り組みなどである。「自己管理能力の向上」についての教員アンケートの結果は、約12ポイント上昇し、昨年度下降したポイントを回復した。取り組みの継続が重要である。今後は主体性、積極的な姿勢、自己管理能力はますます重視される時代となる。情報の溢れる中、自分に必要な情報を選ぶこと、スケジュールを立て自分の生活を管理していくことは課題解決型、探求型学習への第一歩である。SNSから大量に配信される情報を有効に活用して時間とエネルギーを自身の向上のために使うためには、授業・評価のあり方そのものの転換が必要であり、それこそが今行われている教育改革の中心となるだろう。</p> <p>授業・補習内容の充実 高校生の希望者補習(水曜・土曜講座)、自習用講座(BB講座)の成果については昨年度から12ポイントの下降であった。一つの講座に集まる受講者のレベルやニーズに幅があり、どの層にも満足が得られなかったようである。次年度は講座内容を発展的なものに限り、対象を絞った講座として展開する。</p> <p>一方で分割授業、習熟度別授業については、肯定的な回答は、昨年度から7ポイント下降。分割によつてもなかなか成果の上まらない生徒もあり、放課後学習の対象者になっているという現実の反映であろうか。また、電子黒板や、MM(マルチメディア)教室の利用については8ポイント下降であった。一定の教科から使用に広がりが見られないということであろうか。英語、理科など多くの教員による継続的な利用・工夫が進んでいる教科がある一方で、まだまだ限られた教員の利用にとどまっている教科も多い。さまざまな教科の授業に活用していくため、環境整備も課題である。</p> <p>今年度は、ビッグシスターによる放課後学習プログラムに加え、基礎学力定着学習プログラムをスタートした。これについては6.5ポイント上昇であった。高校教頭の下、中1・2、高3の学年の担当教員と、高3生徒たちが、支援の必要な生徒たちへの寄り添う学習に継続的に取り組んでいる成果であり、とにかく毎日学習する時間を確保する習慣をつけるためにはじめた学習制度の成果である。</p> <p>新しい学力観・大学入試改革への対応 上記課題について、「教科、学年での話し合い、準備の進捗状況」については、約40%の教員が肯定的回答を寄せており、昨年度より10ポイント上昇となった。国際バカロレアのカリキュラム、評価方法を学びつつ、学校全体で取り組みを続けていきたい。また「英語の外部検定受験への働きかけ」については、授業の中で普通科文系でも取り組みが始まったこともあり、肯定的回答は83%と、17ポイント上昇となった。進路委員会を中心に、学年、担任、クラブ顧問の協力で良い方向に進んでいる。「協定校推薦制度の進路保障の意義」については85%の教員が肯定的回答を寄せている(昨年度より18ポイント上昇)。協定校推薦の人数枠が25名から40名に拡がり、</p>

ポートフォリオの作成や、課題探求型の学びに取り組む必要から、また授業以外の自学自習や放課後学習のツールとして、SNS 利用についてのリテラシー、著作権、盗作等アカデミックオネスティーについての学習プログラムの構築が必要である。一方、スマホ依存の傾向にある生徒の指導も大きな課題の一つである。

挨拶の取り組みは、中1から中2で下降する傾向にある。思春期独特の心理も関係するかとも思うが、気持ちはあっても声に出して表現することが苦手な生徒が多い。高校生になると実行できる生徒が増えていくが、高3以外は70%台を推移する。社会での大切なコミュニケーションの第一歩として、取り組みを続けたい。

「自己管理能力が身についたか」については、3年前の取り組み当初に比べて、中1での意識づけは出来るようになったが、モチベーションを維持、向上させることは難しく、高1までは60%台を推移し、高2で75%、高3でようやく85%に達する。今後も生活指導の重要な項目として、この自己管理能力の獲得が上げられる。OJダイアリー、試験2週間前学習計画表の提出など、具体的な取り組みを続けながら推進したい。

学校行事について

学校行事については、今年度も、生徒会主催の行事、学年ごとの行事、ともに6学年が85~90%以上の生徒が、「生徒同士のつながりを深めるために有意義である」と答えている。卒業を控えた高3生徒の肯定的回答率は98%を超えている。生徒の行事への満足度は大変高いことがわかる。これは生徒が主体的に行事を運営し、かつ参加していることによる成果である。

学校生活について

「楽しく充実している」については、「クラブ活動が活発である」という項目については、87～96%の肯定的回答が得られた。一方、生徒からの相談に対する教員の姿勢、学校生活への教員の指導の姿勢については64%～80%台まで学年によってばらつきがある。この項目についても、宗教・解放教育への意識と同じ中2・3で一度下降し、高校生になって回復、上昇する傾向が見られる。生徒が中2・3で一度、大人に対する反抗期を迎えて壁にぶつかり、やがて教員とのコミュニケーションや信頼が少しずつ構築されていくと考えることができる。

進路指導について

中2から中3にかけて、どの学年も高校のコース選択をきっかけに、進路についてよく考えるようになっていくようだが、高1で少しカーブが緩み、また、高2になって真剣に考えるようになる傾向がある。高2から高3にかけては緩やかなカーブとなり、学年によって少し下降したりと揺れる。ただ、「卒業後の進路に向けて考えたと思うか」の項目は、どの学年もほぼ同じ傾斜で右肩上がりになり、中2・3からは急カーブで肯定的回答率が伸びていく。将来進みたい方向については中3で少しずつ見えてくるが、昨今の多様な大学入試のあり方、出題傾向の変化などから、教科選択や時間の使い方を意識的に決めかねる生徒たちの状況がコース選択の高校での微妙なカーブに顕れているようである。

本校での保護者への連絡ツールの主なものは生徒に持ち帰らせるプリント類である。行事や、クラブ等についての情報提供としては、学年、学級通信、H.P.のクローズドサイト等がある。緊急時はNTTコミュニケーションズのFairCastを利用している。

この結果から考えられることの一つは、保護者宛のプリント類が、生徒から適切に手渡されていない可能性があること。二つ目は、思春期の子どもたちの学校生活に対して、保護者としては心配が多く、学校からの細かな情報提供を求めているということである。おそらく、行事や予定等の連絡はもちろんであるが、我が子の学習状況やクラス、クラブ活動での様子などを知っておきたいという思いである。学校での様子を全く話さなくなる子どももいる中で、保護者の気持ちとして共感できる。教職員・保護者が生徒の自律・自立を阻害しないように、見まもりを続けるためにも、学校と保護者間の信頼と連携が重要である。

また、個別に対応が必要な生徒に対する連絡や手当について、教科担当と担任の細やかな連携が必要であるが、行き届いたサポートを行うには課題も多い。保護者と協力してその生徒に必要なサポートに今後も努めたい。

学校としては、配布したプリント類は、クローズドサイトにその都度アップすることとし、また、必要な情報はH.P.や学年、学級通信を利用して提供していきたい。保護者にも、できる限り子どもとの対話を心がけていただきつつ、心配なことについては、学校に連絡をいただき、連携して見守るように今後も努めていきたい。

へール会(PTA)活動について、保護者の約90%から肯定的回答を得た。

本校はPTAを創立者の名前をとってへール会と呼んでいる。へール会の役員(本部委員・学年委員・学級委員)は、担任をはじめ教職員と協力して、互いの親睦をはかりつつ、学校の多くの活動に協力して下さっている。生徒数の減少、物価の高騰、消費税率のup等で、へール会会計逼迫の折から、経費削減のため、夏の親睦会を取りやめ、クリスマス会への回避値上げ、参加人数増を呼びかけるなど工夫を凝らして、安定的な運営を実現して下さった。

中高6学年の保護者有志、教職員約200名が集うクリスマス会、私学助成のための署名活動は保護者全員にご協力をいただいている。また、発足して6年になるお父様の会ウエルミナ・メンズクラブ(WMC)の会員も少しずつ増え、へール会への父親の関心も高まり、行事への参加者も年々増えている。

また本部役員の方々には、校外で行う学校説明会(evening説明会)

推薦入試出願までに要求される到達レベルが上がったが、その基準を目指して入学時より努力する生徒もおり、早い時期から学ぶ動機と意志をもつ契機となっていることはよいことである。生徒たちが推薦入試への意識を高く持ち、大学入学に向かって学び続ける姿勢を保つように指導していくことが重要である。**英語科・英語教科の改革** 昨年度から実施の「英語科高2生徒全員を対象としたエンパワーメント授業について」、また「外部検定目標への取り組みについて」の肯定的回答は80%(昨年82%)、「国際特別入試制度及びその制度による入学生の課外授業の成果についての肯定的回答は約63%(昨年から4ポイント下降)であった。次年度国際特別入学生は22名であることから、2クラス展開とし、内容についても見直しを行う。**理系2コース(2類・1類)の導入**内部生、高校入学生ともに理系への関心が高いことから、2類難関理系大学志望、1類幅広い理系大学志望として作年度より2コース制を導入、高校募集人数も理系で30名とした。このことが、生徒たちの進路選択の幅を拡げ、希望する学習環境の提供に役立ったかという問いに対して、肯定的解答は61%(昨年度51%)であった。理系進路を諦めず、1類生徒がモチベーションを保つには、しっかりと学習に取り組む必要がある。スタート年度の昨年よりは、良い方向に進んでいるものと考えられる。

生徒の生活全般に対する指導 SNSの利用については、「生徒への適切な指導について」肯定的回答は45%(14ポイント上昇)、「保護者の理解と協力を得られたかについて」51%(10ポイント上昇)、保護者の危機感も年々強くなり、学校としても保護者向け講演会を持ち、保護者との連携を目指しているが、個人情報や画像の無断up、人間関係のこじれ、依存による学習、健康への影響、ネット友とのトラブル、被害など、指導が続いているが、指導を受ける生徒の延べ数は少しずつ減る傾向にある。

服装、身だしなみ、挨拶、公共のマナーの指導について、どれも肯定的回答はいずれも上昇(2~14ポイント)である。生活指導委員会を中心にした日々の地道な取り組みによる成果である。

留学への取り組みの充実 留学については、留学生の受け入れ、本校から送り出す留学生の学びの成果ともに充実しており、留学を希望する生徒へのサポート体制も整っているという教職員の認識(肯定的解答78～84%)であるが、充実した交流とサポートの項目はともに昨年度から8~12ポイント下降している。めまぐるしく変化する国際情勢、ニーズの多様化、大学入試改革の方向により、卒業後の進路にも直結していくことから、情報収集と研究の継続が必要である。

人権意識を深める取り組み/心身の健康と安全を守る指導

学校、学年の人権プログラムの充実については5ポイント下降、、支援教育(長期欠席、不登校傾向等の生徒への指導)・いじめの未然防止については80～85%(7~13ポイント上昇)であった。取り組みは精一杯継続しているが、なかなか思ったところまで到達できず、互いの意見を交わし合いながら進めていくだけのゆとりを十分に持っていない教職員のジレンマが伝わってくる項目である。厳しい現実ではあるが、助け合い、生徒をサポートしていくことにたゆまず向き合っていきたい。教員間の助け合いについては4ポイント上昇。

Ⅲ教育の実施体制の改善

募集・広報活動 「本校の特色を活かした取り組みを提案、アピールできているか」「本校の広報活動、募集対策は適切か」「募集・広報に積極的に関わることができたか」の各項目について、肯定的回答率は昨年度は67%～77%あったが、今年度は77%～81%と、大きく上昇した。教職員の募集への意識は高まり、広報活動への協力も得られていることは心強い。結果として2018年度入学者は定員190名を上回り、昨年度から44名増となった。時代の厳しさは増しこそすれ緩むことはないが、本校らしい教育を進めていくために互いに意見を交わし合い、課題を共有し、本校の魅力を受験生に伝えていくことで一致していきたい。

図書館活動 約17万冊の蔵書を誇る本校図書館は、中高大短が利用する充実した図書館である。専門知識を持つ司書(専任を含め6名)が、手厚く利用のサポートを行い、生徒の豊かな学びに貢献している。教職員の図書館の活用については昨年度と同じ45%であり、まだまだ改善の余地がある。またシステムやサービスの問題よりも教職員が多忙で、図書館を利用するゆとりがない現実も推察される。2018年度からIBコーススタートが、図書館利用についても牽引役となることを目指す。

教職員の研修プログラム 本校新任教員対象研修「チームOJ」、キリスト教学校教育同盟の中堅者研修、カウンセリング研究会のプログラムについては、役立っていると感じている教職員は今年度は昨年度と同様50%をやや上回る結果となった。多忙を極める現状の中ではあるが、自身の視野を広げ、働き方を見直す上でもこれらの研修会に参加することが必要であると強く感じる。学内の取り組み、また本校を会場にしたキリスト教学校教育同盟のプログラムへの参加等を今後更に呼びかけ、教員の学ぶ機会を保障するように考えていきたい。

Ⅳ生徒支援

進路指導の取り組み 中学1～高校3年まで各学年での進路プログラムは生徒のモチベーションアップに大いに役立っている(肯定的回答92%昨年から10ポイント上昇)、高校3年生の大学入試直前のプログラムについては、肯定的回答

国際教育について

留学生との交流についてはアンケートを実施した高校全学年で 85%前後の肯定的回答を得ている。年間留学生の印象が一番大きいと思われるが、短期、中期で訪れる留学生と本当に仲良くなる生徒たちを見ていると、このような交流が何よりの互いの文化の理解と平和の基礎であると思わされる。

授業評価について

どの項目についての回答も、全体としてみると昨年度とほぼ同じ数字が出ている。A「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」についての肯定的回答は中学、高校の平均で 71%～ 89%までの開きがあり、どちらも中学生の方が 2～3 ポイント高い。C「クラスに一体感を生み出す指導」、E「集中して授業を受けているか」についての肯定的回答について、中学、高校の平均で 71%～ 87%と開きがあるが、こちらは高校生の方が 2～5 ポイント高い結果となった。D「興味、関心を引き出す工夫」の項目は、毎年他の項目に比べて数値が低く出る。今年の肯定的回答率は、中学、高校の平均で 58%～ 83%までの開きがある。今年も高3が群を抜いて高い数値となった 81.7%(昨年 82.9%)。受験勉強によって主体的に授業に取り組むため、授業の内容への興味が深まる傾向にあることがわかる。今年の特徴は、中学1・2年生が昨年の中学1・2年生をすべての項目について上回っていることである。学習への意欲的な取り組み姿勢が数値に表れている。

生徒は E「集中して授業を受けているか」の数値を上げていくこと、教員は A「教員の授業内容への年間計画」、B「授業のわかりやすさ」を上げていくことで、C「クラスに一体感を生み出す指導」D「興味、関心を引き出す工夫」の数値が上昇していくであろう。

各教員の授業評価は、個別に知らせているが、同じ教科、同じ学年を何クラスか担当している教員の評価が、クラスによってかなり差がある（特に中学生）ことから、教員と生徒の関係づくりが、授業成果に直結していること、また教員の声かけ、発問一つでその教科への生徒の興味や意欲が喚起されることが確認できる。

において、保護者の立場から学校の紹介をしていただく形でご協力をいただくなど、多岐にわたって支援をいただいている。

73%(昨年から4ポイント上昇)であった。大阪女学院大学、短大との連携については 44%(昨年度と同じ)が進んでいると答えてくれた。大学短大のユニークで優れたカリキュラムに魅力を感じて、進学先の候補に入れる生徒も増えており、入試情報の共有等、連携が進んでいることは望ましいことである。

V. ICTを利用した授業等への取り組みの推進

2018年度高1よりe-ポートフォリオを記すことが必須となり、IBコース生徒は入学時よりクロームブックを各自購入、中3の探究型学習でもH.R教室で学校のクロームブックを利用してレポート作成、専任教職員全員には4月～貸与することが決まっている。急ピッチで生徒1人に1台を持たせての学校生活・授業に向かって、時代が動いている。「ICT利用の計画は進んでいるか」の問に対し、39%の肯定的解答を得た(昨年時25%)。

VI. 教務の新(入力)システムの導入準備

VII. 危機管理

生徒・保護者・教職員からのハラスメント(体罰を含む)についてのアンケートを実施し、上がってきた事象について対応を続けている。ハラスメント防止のための取り組みについての肯定的回答 49%(12ポイント下降)、ハラスメント委員会の機能についての肯定的回答(57%であり8ポイント上昇)、ハラスメント委員会は機能しているが、ハラスメントの未然防止には十分ではないという結果が出ている。今年度を振り返り、現代のハラスメントについての教員の認識の向上が急務である。防止委員会が提案している研修を実のあるものにしていきたい。アンケートの対応にあたる相談委員(教職員の互選)の立場の難しさはこれまでも指摘されてきているが、生徒と教職員自身の心身の健康、命を守るための重要な取り組みとして明確に位置づけて、互いに協力してこの課題に当たっていきたい。

「地震をはじめ防災への取り組みについて」は少しずつ進めているが、避難時の備蓄、地域との連携等まだまだ多くの課題があり、計画途上である。回答は昨年並みであった。

VIII. 施設・設備の保全と充実

さまざまな施設設備の改修が必要となっている現状から、昨年からアンケートにこの項目を追加した。肯定的回答は昨年同様72%であった。経済的な裏付けが必要なことでもあり、なかなか十分と言うわけにはいかないが、教職員の意見を聞き、理解を得て進めていきたい。

IX. 教員の労務環境改善

1週1日の研修日等労務環境の改善については、肯定的回答は81%(昨年54.9%)。今後も教員が教育のために研鑽を積むゆとりが少しでも持てるよう、労務環境について改善をめざしたい。

3. 本年度の取り組み内容および自己評価

	重点目標	具体的な取り組み計画・内容	評価指標	自己評価
I. 建学の精神と教育理念の実践	<p>1. キリスト教に基づく人間理解の深化</p> <p>2. 建学の精神の再認識と再構築</p>	<p>時代の求めに応じた宗教教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> 日々の礼拝、宗教行事(修養会、伝道週間等) 宗教部付クラブ活動、有志による施設訪問、ボランティアの継続。 被災者支援の会による東北ボランティアキャラバン(2015年度からは年1回夏)、東北支援物販(文化祭等)、追悼礼拝の継続 日本国際飢餓対策機構、ワールドビジョンの行っている里子支援への協力 学生YWCAを中心とした釜崎での「炊き出し」への参加 	<p>*通し番号は教職員アンケートの番号 中期計画の項目順とちがっているため、一部順番に入れ替わりがあります。</p> <p>1. 礼拝、宗教行事等、キリスト教教育全般を通して「愛と奉仕」の精神をもって、互いの個性を尊重し合い、自分自身の生き方を考えるよう導いているか。</p>	<p>本校の精神の土台であるキリスト教教育については、134年の伝統の中で生徒、保護者の理解と協力を得、「<u>生き抜く力」「愛と奉仕の精神」を養うという人格教育として成果を上げている。</u> <u>自分に与えられた力を自分のみではなく、他の人に用いるために学ぶ意識が生徒に育っている。</u> <u>女子校という環境を最大限に活かした教育が実践できている。</u> 教職員の世代交代の中で、キリスト教教育の理念が時代の求めに応じた形で再認識、再構築されるよう継承していくことが重要である。</p>
II. 教育の内容と学習支援の充実	<p>学力向上の取り組み —新しい学力観への対応—</p> <p>2. 国際理解教育の推進</p>	<p>(1) 自学自習・自己管理能力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> OJダイアリー、学習計画表の活用による自己管理能力を身につける指導を継続する。 中学校校舎内に English activity スペースを設置 高校校舎の質問コーナーの拡充の検討。 *分割授業、ビッグシスター制度によるボトムアップに加え、実力錬成補習、大学入試準備プログラムを継続、発展させる。 *ビッグシスター制度…推薦入試で進学先の大学が決まった高校3年生が中学1、2年生の学習を補助する制度 中1・2 学力定着学習(数学・英語各週2回)をスタート 各学年支援の必要な生徒10名を教員2名で、放課後宿題等課題の学習を50分行う 水曜講座(高校3年文系有志補習)、土曜講座(高1・2有志補習)、BB講座を継続、充実させる。 BB講座の英検講座のみ受講する制度の拡充。 <p>(2) 論理的思考力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> 論理的思考力の構築のため中学1・2年生に「論理エンジン」を導入し、中3での探究型授業(2018年度～)をスタートさせるべく準備する。 <p>(3) シラバスの検討・改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 2020年の大学入試改革を見据えて、中高一貫カリキュラムを見直し、各教科でシラバスの改訂を行う <p>(4) 英語科英語教科の改革</p> <ul style="list-style-type: none"> 4技能外部検定試験に対応するため、高1・2の英語の授業にスピーキングの内容を取り入れ、GTEC CBT、他の検定試験も積極的に奨励する。 2015年度S2英語科全員参加で始まったエンパワーメントプログラムの内容の継続・発展。 <p>(5) 「国際特別入試制度」の継続と発展</p> <ul style="list-style-type: none"> (中学2015年度よりスタートしたこの入試制度の入学後の学習プログラムの整備を進め、国際理解教育を推進する。 <p>(6) 国際バカロレアの導入</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本語DP校としての認定を目指し、探究型学習、アクティブラーニングについて全教員が授業実践のために学びを進める。 <p>(7) 理系2コース制の導入</p> <ul style="list-style-type: none"> 理系を1類、2類の2コース制を充実したものとする。 <p>*YFUの年間留学生受け入れ *オーストラリアRavenswood校(姉妹校)との交換留学</p>	<p>2. 中高6年間の指導目標を明確にして指導できたか。</p> <p>3. 生徒の学力(学力推移調査、またはスタディーサポート等のデータを参考に)は全体的に見て上昇したと思うか。</p> <p>4. 生徒の自学自習、自己管理能力は向上したと思うか。</p> <p>5. 高校夏期実力錬成補習は成果を上げていると思うか。</p> <p>6. BB講座、土曜講座、水曜講座によって、生徒の学習が充実したものになったと思うか。</p> <p>7. 分割授業、習熟度別授業による成果はあったと思うか。</p> <p>9. ビッグシスター制度による放課後の学習プログラムは成果を上げていると思うか。</p> <p>10. 今後の国公立入試等の改革、(探究型・合科型)に向けて、学年や教科での話し合い、準備は進められたか。</p> <p>11. 大学入試の外部検定利用に向けて、生徒たちが英検、TOEIC等、外部検定を受験できるように、学校としての学年、教科、クラブ等への働きかけは十分にできているか。</p> <p>13. 継続中の英語科改革(高2エンパワーメント授業、授業改革、外部検定目標達成等)について成果はあったと思うか。</p> <p>14. 国際特別入試制度、及び国際特別入試による入学生の週1回の課外授業について、国際理解教育のために成果を上げていると思うか。</p> <p>15. 理系2コースの導入により、中学入学生及び高校入学生の進路の選択肢を上げ、学習の充実をはかることができていると思うか。 (中期計画の項目順で記載しています)</p> <p>24. 留学生の受け入れにより、充実した交流ができたと思うか。</p>	<p><u>教員は指導目標を明確にし、生徒の学力を上げるべく努力を続けて、成果を上げている。</u> <u>「自由」に基づく自己管理の力を育てるため、継続しているスケジュール管理の指導は成果を上げている。</u>また、高校生には有志補習、講座を提供してきた。<u>一定の成果にとどまっている。</u>講座内容の吟味と対象生徒の絞り込みにより改善していく。また、ネット活用のツールの導入を検討している。</p> <p>英語・数学の分割授業は学力の向上に役立っているが十分ではない。そのため、進路の決定した高3に協力を得て中1・2の学習支援(ビッグシスター制度)は確かな学力保障になっている。 今年度始めた、特に支援の必要な生徒への<u>学力定着学習も確かな学力保障になっている。</u></p> <p>探究型・合科型の主体的学習への改革には、授業・評価の方法そのものの改革が必要である。 本校では、2018年に英語科の中に国際バカロレアコース(日本語ディプロマ)の設置する。<u>教員研修や、カリキュラム作成、評価方法、体制づくりが、全教科、全授業の探究型、横断型授業のモデルとなっていくと考えている</u></p> <p>普通科でも外部検定に対応した授業が始まり、<u>成果を上げている。</u>また、<u>希望者対象の土曜講座も成果を上げている。</u>中学、高校1年からの検定受験者は大幅に増加した。</p> <p>本校では、中学から4技能を鍛える英語教科の充実した学習を行っているが、<u>2015年度より高校2年生英語科生徒を対象としたエンパワーメントプログラムを実施し、成果を上げている。</u></p> <p>受験生に対しては<u>国際特別入試(中学)とその後の国際教育プログラムを続けている。</u>着実な成果を上げている。</p> <p>作年度設置した<u>理系2類・1類の2コースは、入学生の進路希望を叶えるために徐々に成果を上げている。</u></p> <p>留学生の受け入れについてはYFUの年間留学生1名他、中期、短期数名の受け入れにより、<u>よい交流が実現している。</u></p>

	<p>*カナダ、オタワLongfield Davidson校(姉妹提携校) *YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月) *中期留学(高校1.2年3学期)の充実 上記活動を通して国際理解教育に取り組む。</p> <p>・中学でのプレエンパワーメントの企画 ・夏休み海外研修プログラムの見直し</p> <p>3. 生徒・教員の人権を深める取り組み／生活指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間関係を構築するカールルの遵守、マナー・礼儀の尊重、コミュニケーションによる他者理解の育成 ・SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。 ・授業・学級活動・生徒会活動・クラブ活動等の活動が安全かつ充実したものになるように努める。 ・生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。 ・通学時の安全指導に努め、警察と連携しつつ不審者の警戒をする。 ・学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。 <p>4. 学校行事による集団づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自主的、かつ計画的なリーダーシップ ・協調性とチーム力 ・総合的な企画力・理力 (時間、費用、あとかたづけ、ゴミ処理等) ・企画・計画書、活動記録の作成、教員の助言と指導 	<p>25. 本校から留学した生徒は、留学の成果を上げることができたと思うか。</p> <p>26. 留学を希望する本校生徒に対して、適切なサポートができていたと思うか。</p> <p>19. SNSの利用について、生徒に必要な指導ができたと思うか。</p> <p>20. SNSの利用について、保護者に理解と協力が得られたと思うか。</p> <p>21. 服装、身だしなみの指導は適切だと思うか。</p> <p>22. あいさつについての指導は適切だと思うか。</p> <p>23. 公共のマナーについての指導は適切だと思うか。</p> <p>28. 学年、学校の人権教育のプログラムは、時代の変化に対応し、充実していると思うか。</p> <p>37. 教職員組織はキャンパスハラスメント事象の防止に積極的に取り組んでいると思うか。</p> <p>38. キャンパスハラスメント委員会及び調査は、有効に機能していると思うか。</p>	<p>留学については、<u>高校1年生から短期、中期、長期、さまざまなプログラムが設けられており、生徒、保護者からも評価を得ている。</u>時代のニーズが高まる中で、より実質的な内容をともなったものにするべく努力を行う。近年は、<u>海外への進学が注目されている。</u>2018年度導入するIBコースは海外進学を目指す生徒にとって意義深いものになるだろう。</p> <p>SNSの利用指導は、喫緊の対応を迫られている課題である。<u>保護者自身の意識が少しずつ高まり、危機感をもって家庭での管理の必要性が理解されてきたように思う。</u>しかし、進化していくSNS利用について、生徒自身が管理を行うことは至難の業である。<u>保護者と協力して生徒の指導に当たりたい。</u></p> <p><u>身だしなみ、挨拶、公共のマナーについての指導は徐々に成果をあげつつある。</u>今後もさらに指導を継続する。</p> <p>解放(人権)教育のプログラムについては、<u>キリスト教教育の「愛と奉仕」の実践と一体となって生徒の心の成長、生きる力となって実を結んでいるが、時代の変化のなかで、テーマ、シラバスの見直しについて委員会での検討が必要である。</u></p> <p>キャンパスハラスメントについて、<u>年度末のアンケートへの取り組みや委員の働きは評価されているが、防止のためには十分とは言えず、今後の新しい取り組みが必要である。</u></p> <p>本校のさまざまな行事は、宗教教育、解放教育とともに、<u>生徒の人格形成に大きな影響を与える教育である。</u>生徒は、行事に主体的に関わる中で、人と繋がり、自分が責任を担い、仲間とともに何かを達成していくことの意味を深く感じて、<u>広い意味でのソーシャルスキルを身につけている。</u></p>
<p>III. 教育の実施体制の改善</p> <p>1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み</p> <p>2. 組織改善の取り組み</p> <p>3. 図書館機能の充実と教員との連携</p> <p>4. 教員の人材育成</p>	<p>(1)広報の充実 (2)説明会・学校訪問への全教員での取り組み (3)入試対策室の充実 (4)中学「国際特別入試制度の継続と発展」 (1)中高6年を偏りなく経験できる人事 (2)世代交代を見据えた指導理念・スキルの継承</p> <p>(1)建学の精神の学び (2)世界の変化や課題についての学び (3)支え合う組織づくり (4)他校との連携 (5)新しい学力観への対応 (6)新しい授業形態(アクティブラーニング)への対応</p> <p>(1)蔵書の充実 (2)利用教育 (3)広報の充実 (4)図書委員会活動 (5)その他</p> <p>(1)宗教・解放プログラム (2)グローバル進路 (3)大学院との合同プロジェクト</p>	<p>32. 変化する時代の中で、社会の課題に対して大阪女学院の特色を活かした取り組みを提案、アピールできていると思うか。</p> <p>33. 本校の広報活動、募集対策は適切だと思うか。</p> <p>34. 募集・広報に積極的に関わることができたと思うか。</p> <p>36. 解放・生活指導等教職員研修会、チームOJ、学院全体研修会、キリスト教学校教育同盟主催の中堅者研修、カウンセリング研究会等は、学校運営、教職員の集団づくりに役立っていると思うか。</p> <p>35. 授業、進路指導において、図書館を有効に利用できたと思うか。</p>	<p>昨年以上に教職員全員で募集・広報にもあたっていくことができた。殊に中学訪問は、本校の教育内容を現場の教師が紹介することにより<u>中学の先生方の適切な進路指導による受験生が増えている。</u>本校教員自身にも外から学校を見る機会となった。<u>オープンキャンパス、イブニング説明会、地域説明会、入試説明会、キャンパスナビと本校の魅力を教員一人一人のことばで受験生に伝えることができた。</u>私学の受験事情は今後も厳しい。生徒の成長を第一とし、教育内容の充実を大事にして、運営を進めていきたい。</p> <p>教職員世代交代が続く中、<u>建学の理念をはじめとして、指導上の財産の継承が急がれる。</u>ふだんの業務の中だけではなく意識的に語り合う機会が必要である。多忙を極めるため研修への参加もままならない現実である。<u>互いの悩みや慕る思いをことばで伝え合う機会が重要である。</u></p> <p>全生徒への丁寧な利用ガイダンスが行われ、授業や課題などで、<u>十分活用できる充実した図書館であり、司書の助言も受けられるため恵まれた環境であるが、生徒の自由な利用を別にすると、一部授業で利用されているにとどまる。</u>今後の授業、レポート課題等における利用の研究が必要である。</p>

	5. 中高大短連携プログラム			中高の卒業生、教員の、大学短大への認識は変わり、とても身近なものになってきた。教育内容への理解が進み、評価も高くなっている。 <u>連携は進んでいる。</u>
IV. 生徒支援	1. 自己実現を促す進路指導	(1)進路キャリアガイダンスの充実 (2)基本的学習習慣の確立 (OJダイアリー・ビッグシスター制度) (3)英語外部検定への対応 (4)新しい大学入試への対応 (5)併設大学・短大の特色を活かした進学指導 (6)協定校推薦枠の拡大	16. 各学年で行われる進路プログラムは、生徒の意識、意欲を高めるために役立っていると思うか。 17. 3学期のセンター対策、私大、2次対策のプログラムは、大学入試直前のサポートとして成果を上げていると思うか。 12. 現在の協定校推薦制度は、生徒の進路指導、進路保障のために十分に活用されていると思うか。 18. 大阪女学院短大・大学との連携は進んでいると思うか。	中高での <u>進路指導のプログラムは、生徒により影響を与えている。また進路室からのさまざまな情報の発信は時代の変化に対応して、適切である。</u> <u>国公立入試センター、前期、後期入試をサポートする高3、3学期のプログラムは、対象の生徒を支え、成果を上げるために定着しつつある。</u> 関西学院大・同志社女子大・神戸女学院大との協定校推薦制度は、 <u>推薦枠が拡大され、魅力ある制度として、生徒たちの進路保障に役立っている。</u> 同時に、高校在学中にかなり高い英語力が求められるため、 <u>早い段階から検定に挑戦し、学力レベルの向上に努める生徒が増えている。</u>
	2. 心身の健康と安全を守る生活指導と生徒支援	自ら健康の保持増進を図る能力を育成する。そのために保健室・教育相談室（学校カウンセラー）、サポートルームが連携し、生徒・保護者をバックアップする。必要に応じて医療機関や関係諸機関と連携をとり、適切な支援を目指す。	29. 長期欠席、不登校傾向等の要支援生徒への支援は適切であったと思うか。 30. いじめ等の事象の発生を未然に防ぐため、意識的に取り組めたと思うか。 31. さまざまな課題について、教員間でコミュニケーションを取り合い助け合って取り組むことができたと思うか。	大学・短大の教育内容への理解が進み、評価も高くなっている。 <u>連携は進んでいる。</u> 支援教育委員会(2010年設置)は、教頭がコーディネーターを担い、担任、学年主任、スクールカウンセラー、養護教諭、サポートルーム指導員、生活指導部長、教務部長が構成員となり、校長のもとに <u>チームで支援プログラムを検討する体制が機能している。</u> 担任が一人で抱え込まないように、適切なサポートができるように互いのコミュニケーションを大切にしていきたい。 この支援機養育委員会はいじめ防止対策委員会を兼ねている。いじめについての相談があった際に招集することになっている。
V. ICT教育の推進	ICT技術を、今後の探究型、横断型授業に活かしていくことができるように研究する。 (1)WiFi環境の整備を進める。 WiFi環境の整備計画を策定、順次工事を行う。 (2)モニター教員にタブレット型情報端末を配布し、研究を進める。 (3)中学1年生(高校1年生)の入学時のタブレット型情報端末を配布時期を想定し、克服すべき課題等について検討する。 (4)(3)を実施するためにメディアリテラシー教育及び使用ガイドラインの作成を進める。 (5)教師、生徒のタブレット管理はもとより、セキュリティについても対策を検討する。	8. 授業において、電子黒板、プロジェクター、MM教室等が有効に活用されていると思うか。 27. ICTを利用した授業等への取り組み、今後の計画は進んでいると思うか。	学習に関わる環境、施設整備については、重要課題として取り組みを続けている。 <u>電子黒板、MM教室については少しずつ利用が進んでいる。</u> 学校全体として、 <u>生徒各自にタブレットを持たせる方向での準備を進めている。特に次年度の高校1年生からeポートフォリオの作成のため、学年生徒全員にクラッシーを導入する。</u>	
VI. 教務の新システム導入	教務新(入力)システムの導入準備	(1)成績処理等のための入力に関しては、独自のシステムではなく、新システムに移行することも視野に入れ、本格的に研究する。 (2)出席管理から成績処理に至るまでタブレット型情報端末を利用した新しいシステムに移行する準備を始める。		
VII. 危機管理	危機管理	(1)大地震を想定した危険回避訓練を、教職員で検討する。また食料・水等の備蓄の拡充、自宅への連絡方法の確認、帰宅困難者が出た場合の対策について検討する。 (2)地域の避難所としての対策を検討する。重要情報・個人情報の管理の対策を行う。	39. 学校の地震をはじめとする防災への備えは進んでいると思うか。	地震を中心とした防災への備え、避難訓練等、 <u>取り組みは少し進んだ。非常食、水の備蓄、非常電源の確保、簡易トイレ等、購入を進めた。今後も地域と協力して計画的に進めていく。</u>

VIII・施設・設備の保全と充実	施設設備の改修	南校舎外壁補修継続 チャペルの空調及び校舎の空調設備の整備等、優先順位を決めて工事の計画を進める。	41. 校舎、校庭、グラウンド等の施設設備の保全、補修、整備について必要に応じて、計画、実施されていると思うか。	<u>校舎外壁補修をはじめ、教職員の理解と協力を得ながら進められている。</u>
IX・教員の労務環境改善	教員の労務環境改善	1週1日の研修日の維持改善に努め、より働きやすい職場にしていくよう努力する。育児短時間勤務を3歳から小学3年生までと改訂。介護休暇についても検討を進める。	40. 一週1日の研修日をはじめて3年目になるが、労務環境の改善は進んでいると思うか。	<u>1週1日の研修日制度は有効であるが、当然のことながら、生徒教職員全員で一斉に取る休日とは違うので、教職員間の連携、クラス・学年・教科間の情報共有が不可欠となる。また臨時の会議をすることが難しく、定例の会議の回数も限られるので、計画性と工夫が必要である。</u>
X 経費削減と効率化		中高大短、法人の事務の一元化を適宜進める。諸経費の見直し、管理部門の経費削減と効率化を図る。補助金制度を有効活用する。		